

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～問7）に答えなさい。

何か知らないことを人が話しているとき、それを、何でもいいから手がかりをつかもうとして耳をすませていると、くりかえし同じオトのつらなりがあらわれる部分に気がつくことがある。くり返しあらわれるということは、そこだけまとまったかたまりになっているのだから、それをばらさないで、そのまままとめて他のばあいにも流用することができる。それが、いわゆる単語のこともあれば、単語よりも大きな「句」、きまり文句のようなものもあったりする。あいさつことばなどはその代表であるから、まずおぼえて使ってみるのにふさわしいのである。

あるいはこんな受身なやりかたではなく、もっと積極的に打って出て、「これは何なの？」と、目の前にある物の名を聞いて調べあげ、単語帳や文句集を作る方法もある。こうなると、もうすでに言語学者の仕事に大きく一歩近づいているのである。（中略）

私が子どもの頃の国語の教科書に出ていた^{（注1）}金田一京助氏の「心の小径^{みち}」という^A心ひかれる思いのした一編が記憶に残っている。金田一氏は

^{（注2）}樺太アイヌ語と北海道アイヌ語との方言的なちがいを調べるためにこの調査を行ったのだが、子どもたちには、そんなことは心にとまらないし、またどうだっていいことだ。そんな調査の目的などには関心がないのである。

しかし、金田一氏が、「あごひげ」にあたるアイヌ語をしらべるつもりで、自分のあごひげをつまんで、「これは何だ」と聞いた、そしてそれに対する子どもたちの答えを記録したが、あとでしらべたところ、子どもたちの答えたのは、「下あご」のことだったという一節である。私はこの話をうろおぼえだったので、調べてもらったところ、一九三一年に書かれた「片言を言ふまで」という短編が出典だった。その終りの部分に、「言葉こそ固く鎖^{とざ}した、心の城府へ通ふ唯一の小径であった」と述べている。だから、国語の教科書用には、その「心の」と「小径」とが抜き出されて、題名として与えられたのだと思う。この教材が子どもの心をつかんだのは、子どもはまだ、ことば使いで、こうした経験に近いところにいたからではないかと思われる。この意味において、言語学者は、子どもの心性に近い、少なくともその発見的心性に近くあろうと努力している一種族である。

最近、十九世紀のロシアの民族学者ミクルホリマクライという人が、^B金田一さんと全く同じような体験を書いているのを知って、^Cすこぶる興味深く感じた。それについて述べてみよう。

ミクルホリマクライは、ロシア人にはめずらしく、太平洋の南の島々を調べた人だが、ある時、パプア島の言語を研究していて、一枚の木の葉を手にとって、^Dこれは何かとたずねて、その答えをノートに書き込んだ。次に、別の人と同じ葉っぱを示したところ、別の答えがかえってきた。このよ

うにして、三人目、四人目、五人目と同じ質問をくり返したところ、その都度全部ちがった答えを得たという。

あとで ⁽⁷⁾ ハンメイしたところによれば、最初の人は、その葉っぱを生やしている木、二人目はその葉っぱの色である「緑色」、三人目以降は、「汚れている、使えない」などの意味を答えたという(W. Birkenmaier, Vergleichendes Studium des deutschen und russischen Wortschatzes, 1987)。聞かれた方にとっては、それが葉っぱであることは自明なので、まさか立派なおとなが、そんなばかばかしい質問をしているとは思えなかったであろう。そこでよりくわしい ⁽⁸⁾ ゴクセイを答えたのであろう。学問の発する問いが、ばかばかしくて、とてもつきあつてはられないという典型的な例であろうと思われる。

そしてその答えがばらばらだったのは、それぞれの人の注目する点がみな異なっていたということになる。ここで ⁽⁹⁾ シサさされていることは、人が何を話題にしているかという問題は、コミュニケーションの全体にかかわる複雑な問題で、^E ことばがそれ自体として、場面ぬきで自立することのむつかしさをよく示している。

たしかに、こうした根本的な困難はあるにせよ、単語や語句の意味は、それが具体的なモノやできごとや場面に対応しているならば、子どもでもあるいは言語学のしろうとにもある程度はつかまえることができる。しかし、こうした単語や文を成り立たせている、^(注3) 窮極の単位であるオトが、その言語の中にいったいくつあるのか、それらは相互にどのような関係にあつて、どのような ⁽¹⁰⁾ タイケイたいけいを作っているかを発見するのは、きわめて精密な方法を要する高度に知的な作業なのである。それは機械がいかにくわしく記録したからといって、明らかにできるものではない。記録が詳しくくなればなるほどことばについての言語音の正体はつかめなくなってしまうからである。

以上述べてきたことから、言語の研究にあたっては、一にも二にもオトからはじめなければならないことがわかる。言語と直接間接にかかわる研究領域は、哲学、心理学、論理学をはじめ、社会学、人類学など、その名をあげきれないほど、ほとんどすべての学問にかかわりがある。しかし、言語学にとって、これこそは固有の領域だと言えるのはオトの研究である。ただし、物理現象としてのオトではなくて、あくまで人間のことばとして採用されたオトである。

人間が発音器官を用いて発する言語音は様々であるが、しかし動物の一種族として考えた人類全体としては、人種がちがおうと、だいたい同じ発音器官を与えられていると考えてよい。

(注)

- 1 金田一京助……言語学者、民族学者。アイヌ語研究の本格的創始者として知られる。
- 2 樺太……北海道の北方、オホーツク海西南部に位置する細長い島。サハリンの日本語名。
- 3 窮極……物事をつきつめ、きわめること。また、最後に達するところ。

問 1 傍線部(ア)～(エ)の漢字に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は

1

 ～

4

 。

- (ア)
- ハンメイ
- | |
|---|
| 1 |
|---|
- ① イッパン市民の意見を聞く。
- ② 試合のシンパンを引き受ける。
- ③ コハンに小船が浮かんでいる。
- ④ 彼はモハンの生徒ではなかった。
- ⑤ 重い荷物をウンパンするのは大変だ。

(イ)

ゾクセイ

2

- ① ドラマのゾクヘンに期待する。
- ② 江戸時代のフウゾクを調べる。
- ③ 農耕ミンゾクは稲作などを行っている。
- ④ 自分がシヨゾクするチームを応援する。
- ⑤ 負けてゾクグンの汚名を着せられた。

(ウ)

シサ

3

- ① 犯罪をキョウサした罪は重い。
- ② 上司をホサする仕事を命じられた。
- ③ ごブサいたしております。
- ④ 経歴をサショウしてはならない。
- ⑤ 負のレンサを断ち切ろうとする。

(エ)

タイケイ

4

- ① ケイジ板にポスターを貼る。
- ② ケイタイ電話で連絡をする。
- ③ 鉄道モケイを作るのに夢中だ。
- ④ ケイガイ化したきまりを見直す。
- ⑤ ケイトウを立てて研究する。

問2 傍線部A「心ひかれる思い」とあるが、なぜこの一編に心ひかれたのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

ばい。解答番号は 5。

- ① 国語の教科書に出ていた、樺太アイヌ語と北海道アイヌ語との方言的なちがいを調べるといふ調査の目的には関心がなくても、子ども心に「あごひげ」にあたるアイヌ語を調べることが面白く感じられたから。
- ② 金田一氏が、「あごひげ」にあたるアイヌ語を調べるつもりで、自分のあごひげをつまんで、「これは何だ」と聞いて、それに対する子どもたちの答えを記録するというところに、同じ子どもとして興味を持ったから。
- ③ 「あごひげ」にあたるアイヌ語を調査するために、自分のあごひげをつまんで、「これは何だ」と聞いた金田一氏に対し、子どもたちが「あご」にあたる語を答えたという話を読んで、そのようなそをついてはいけな**い**と強く感じたから。
- ④ 自分のあごひげをつまんで、これを何と呼ぶかと聞いてきた大人に対し、その動作が下あごを指したものだと思い、「下あご」を意味する語を答えたというような経験に近いものを、子どもたちは感じたから。
- ⑤ 言語学者は、子どもの心性に近い、少なくともその発見的心性に近くあろうと努力している一民族であるが、民族学者のミクルホマクライという人も金田一さんと全く同じような体験を書いており、興味深く感じたから。

問3 傍線部B「金田一さんと全く同じような体験」とあるが、どのような点が「同じ」なのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び

なさい。解答番号は 6。

- ① ある物事を指すことばを調べようとして、そのものを指し示して人に聞いたところ、その都度全部違った答えが返ってきたという点。
- ② ある物事を指すことばを調べようとして、人に聞いたところ、その指し示した物事を相手が勘違いして別の答えが返ってきたという点。
- ③ ある物事を指すことばを調べようとして、人に聞いたところ、相手がばかばかしい質問だと思い、全部違った答えが返ってきたという点。
- ④ ある物事を指すことばを調べようとして、そのものを指し示して聞いたところ、相手が親切に、よりくわしい説明を答えてくれたという点。
- ⑤ ある物事を指すことばを調べようとして、人に聞いたところ、その学問的意義が理解されず、真面目に答えてもらえなかったという点。

問4 傍線部C「すこぶる」の本文中における意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 7。

- ① ほんの少し、いささか
- ② たいそう、非常に
- ③ 震えるほど、恐ろしく
- ④ ひどく感極まって
- ⑤ 少し心が動かされて

問5 傍線部D「これは何か」とたずねたのは、パプア島の言語についてどのようなことを調べたかったからか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

い。解答番号は 8。

- ① 葉っぱを生やしている木の名前
- ② 葉っぱの色である「緑色」を指す言葉
- ③ 「汚れている、使えない」などの意味の語
- ④ 葉っぱのことを意味する語
- ⑤ 葉っぱの詳しい説明をする言葉

問6 傍線部E「ことばがそれ自体として、場面ぬきで自立することのむつかしさ」とあるが、その説明として、最も適当なものを、次の①～⑤の

うちから一つ選びなさい。 解答番号は 9。

- ① コミュニケーションにおいて、それぞれの人の注目する点はみな異なっており、話題にする問題がどうしても違ったものになるため、会話を成立させるのは困難であるということ。
- ② 言語を研究する場合、例えばアイヌ語やパプア語は日本語とは単語や語句の意味が異なるため、機械を使っていかにくく記録したからといって、言語音の正体を明らかにできるものではないということ。
- ③ ある物を指し示してそれを意味することはを調べようとしても、それぞれの人の注目する点がみな異なっていたように、同じ物についても場面によってどう話題にするかは異なってしまうということ。
- ④ 言語の研究において、学問の発する問いは子どもや外国の人にはばかばかしくて、とてもつきあってははいられないというものであるため、コミュニケーションが取りにくく、調査しにくいということ。
- ⑤ 言語の研究は、一にも二にもオトからはじめなければならないため、土地の人間が発音器官を用いて発する言語音をその地方や外国に行って聞き取らなければならないということ。

問7

本文の内容に合致しないものを、次の①～⑥のうちから二つ選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

10

11

。

① 何か知らないことばを身につけようとする場合、くりかえし同じオトのつらなりがあらわれる部分は、いわゆる単語や「句」、あいさつことばなどであるため、まずその部分をおぼえて使ってみるとよい。

② 言語の調査方法として「これは何なの？」と、目の前にある物の名を聞いて調べあげ、単語帳や文句集を作る方法もあるが、相手はそのような言語学者の調査の目的などには関心がなく、ばかばかしいと思われることが多い。

③ 言語学者が言語の調査を行う場合、簡単な意味の単語について質問をするため、まさか立派なおとなが、そんなばかばかしい質問をしているとは思われず、別の答えが返ってくることもある。

④ 同じ葉っぱを見ていても、人によって、「その葉っぱを生やしている木」、葉っぱの色である「緑色」、「汚れている、使えない」などといったことを思い浮かべるように、注目する点は異なる。

⑤ 言語の研究にあたっては、一にも二にもオトからはじめなければならないため、物理現象としてのオトについて機械を使ってくわしく記録し、人間が精密な方法で分析するという高度に知的な作業が必要である。

⑥ 単語や語句の意味は、それが具体的なモノやできごとや場面に対応しているならば、ある程度はつかまえることができるが、その場面によって対応するものなどが異なるため、調査がむずかしいことがある。

国語の問題は次に続く。

(下書き用紙)

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～問7）に答えなさい。

美術館スタッフの方から主旨と進め方の説明があり、グループ分けが始まります。一グループの人数は五、六名。各グループに必ず一人は見えない人が入るようになっていきます。私はこのとき運良く、白鳥建二さんと同じグループになりました。ただしそのときは、お洒落な全盲者がこの方法の生みの親の一人であるということなどアつゆ知らず。

簡単な自己紹介と障害の程度を確認したあと、グループごとに移動して、指定の作品を順番に見て回ります。一作品にかかる時間は二十分程度。通常の美術鑑賞からすると、かなりゆっくりしたペースです。

さあ、どうやって鑑賞するのか。作品を触ったり見たりすることはできませんから、武器になるのは言葉だけです。そう、作品の前にみんなで立ち、その作品について語り合いながら鑑賞するのです。

「だいたい三メートルくらいのスクリーンが……見える範囲で三つあって、それぞれに映像が映し出されています」

「一つ目は雨が降っている様子、二つ目は人々が水に飛び込んでいる様子」

「飛び込んでいる水は……あんまりきれいいじゃないです」

「えっと……さっき太陽って言ったのは実は月でした」

「これは何だろうな、すぐにはわからないですね。ざらざらした感じ……」

ひとまず、見える人が見たものを言葉にしていきます。映像はどんどん動いていくから言葉にするのもなかなか大変。その言葉を、ひとつひとつ確かめるように耳を傾ける白鳥さん。しばらくすると彼も質問を投げかけ始めます。

「飛び込んでいるのは大人？ 子ども？」

見える参加者が答えます。

「子どもです……とつても楽しそうで……。インドかどこかの国かな」

現在では「セッション！」に限らず全国で行われているこの方法を、「ソーシャル・ビュー」と呼んでみたいと思います。通例、美術館では声を出すことはあまり奨励されていませんから、鑑賞は個人的で内向的な経験になりがちです。しかしこのワークショップでは、積極的に声を出してグループの仲間とやりとりをしながら作品を鑑賞していきます。人と関わりながら見る。だから「ソーシャル」な「ビュー」というわけです。（中略）

さて、ソーシャル・ビューの具体的な内容に入っていきます。先ほども指摘したとおり、ソーシャル・ビューは「見える人による解説」ではありません。見える人の仕事は、「正解」を言うことではないのです。

「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」の林さんは、ワークショップを始める前に参加者にこう説明します。「鑑賞するときには、見えているものと見えていないものを言葉にしてください」。「見えているもの」とは、文字どおり目の前にある、たとえば絵画の大きさだとか、色だとか、モチーフなど。ひとことでいえば「客観的な情報」です。「見えていないもの」とは、その人にしか分からない、思ったこと、印象、思い出した経験など。つまり「主観的な意味」です。ここにもまた、情報と意味、というテーマが潜んでいます。

「客観的な情報」や「正しい解釈」だったら、見えない人だって本を読めば済むわけです。^(注1) モナ・リザは〇〇年に描かれた絵画で、中央にいるのはこういうポーズの女性、表情はこんな感じで、背景には〇〇が……そういうアプローチもちろんアリでしょう。でも、それはあくまで「情報」です。知識は増えるけれど、^Aそれは果たして絵画を「鑑賞」したことになるのか。

情報化の時代にわざわざ集まってみんなで鑑賞する面白さは、見えないもの、つまり「意味」の部分を共有することにあります。もちろん、作品を見たその瞬間にぱっと意味が分かる人なんていません。しばらく眺め、場合によってはまわりをまわったりして、自分なりに気になった特徴を「入り口」として近づいてみる。もやもやしていた印象を少しずつはっきりさせ、部分と部分をつなぎあわせて、自分なりの「意味」を、解釈を、手探りで見つけていく。鑑賞とは遅々とした歩みであり、ときに間違ったり、迂回したり、いくつもの分かれ道があったり、なかなか「一筋縄ではいきません」。

B、この遠回りこそが実は重要なのです。

白鳥さんが面白い経験について語っています。美術館に通うようになって間もない頃のことです。白鳥さんは^(注2)印象派の展覧会に出かけ、美術館の職員の人といっしょに、話しながら絵を見てまわっていました。ある作品の前で、その職員の人が「ここに湖があります」と語り始めた。

なるほど湖ねえ、と白鳥さんが言葉をたよりにどんな絵か想像していると、ふいにその職員の人が、自分の間違いに気づいてあわてて訂正しました。「あれ、よく見たら黄色い斑点があるから、これは野原ですね」。その人は、美術館の職員として毎日のようにその絵を見ていたはずですが、にもかかわらず、描かれている情景を完全に誤解していた。笑い話のようなエピソードですが、実はこうした「見間違い」にこそ、「ソーシャル・ビュー」の面白さがつまっています。

現実の野原を湖と見間違える人はいません。この二つは全く別のものです。ではなぜ、野原が湖に見えてしまったのか？ それは、その絵が印象派の手法で描かれていたからに他なりません。

印象派というのは、ご存知の通り、光を描くことをその特徴とします。初めてヨーロッパに行ったとき、太陽の光が妙にチカチカしていて、「これが印象派の光か」と思った記憶があります。日本ではおひさまの光といえば「ぼかぼか」ですが、そのとき私が感じたヨーロッパの太陽は「チカチカ」でした。チカチカした光が風景や人にあたって私たちの目に飛びこみ、その目の中までもチカチカさせる。そこを描こうとしたのが印象派です。

色を表現するにも、絵の具をあらかじめ混ぜて色を作ってからキャンバスにのせるのではなく、いろいろな色の細かい斑点を並べて描くことで、離れて見たときに目の中でそれが混ざって見えるように描いた。印象派とはまさに「D目の、目による、目のための絵画」であつたわけです。

目のための絵画であるということは、印象派が、見えない人に伝えるのが最も難しい様式のひとつだ、ということの意味します。「目がチカチカする」というあの感じをいっただいどう言語化すればよいのか。もちろん、見えない人は文字通りの視覚的な経験としてはそれを実感できないわけですが、なんとかしてEそこを伝えなければ、印象派の絵画を理解したことになりません。

F「意味」が生きてきます。野原が湖に見えてしまった、という美術館職員の間違いは、ウ図らずも、印象派の本質を明かしています。野原の色とは何色でしょう。夏の昼間には緑色かもしれませんが、夕焼けに染まればオレンジ色、夜の闇に沈めば黒紫、冬になれば茶褐色になります。「これが野原の色だ」という決まった色はない。

湖だって同じです。青、緑、赤、黄色……季節と時間によって刻々と変化していきます。物の姿を固定的にとらえず、目にうつる瞬間的な像に注目する。だからこそ、印象派にとつては、それが野原であるのか、果たして湖であるのか、区別は曖昧なものになっていくのです。

G、印象派とは、事実として「湖と野原が似てくるような絵」なのです。「湖っぽい野原」なんて現実には存在しませんが、にもかかわらず印象派を知る上では、この間違いこそむしろ正解です。ただの「野原」ではなく「湖っぽい野原」であること。印象派の定義と言っていいほど、これは本質を突いています。

教科書には、絶対にそうは書いてありません。「この絵には野原が描かれています」という「情報」の説明があるだけ。それに対して、「湖っぽい野原」というのは、見た人の経験に根ざした「意味」です。物理的には同じだったものが、その人にとつての意味としては湖から野原に変化した。情報としては捨象されてしまうこの遠回りこそ、実は印象派の本質を明かすものであつたのです。

（伊藤 亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』による。ただし一부분本文を改変した。）

(注)

- 1 モナ・リザ……イタリアの画家レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた有名な肖像画。女性の上半身が描かれている。
- 2 印象派……十九世紀後半にフランスで始まった絵画の新しい芸術運動。自分の目に映った印象をそのまま表現することを目的としたもので、モネやルノワールなどの画家が有名。

問1

傍線部ア～ウの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 12 14。

ア つゆ知らず

12

- ① あまり気に留めないで
- ② 全く思いもよらないで
- ③ 知っていたが気づかないふりで
- ④ 集中するあまりすっかり忘れて
- ⑤ ほとんど気遣いをしないで

イ 一筋縄

13

- ① 一本だけの、弱々しい細い縄
- ② 細く見えるが、本当は丈夫で強い縄
- ③ 普通のやり方、尋常な手段のこと
- ④ 試みに、少しだけやってみること
- ⑤ 一つのこと、ひたすら集中すること

ウ 図らずも

14

- ① 思いがけず、意外にも
- ② 正確ではないが、おおよそ
- ③ 目には見えない、感覚的なものとして
- ④ 説明できない、不思議なことだが
- ⑤ 突然のことに驚き、あきれるが

問2 傍線部A「それは果たして絵画を「鑑賞」したことになるのか」とあるが、このような表現方法を何というか。最も適当なものを、次の①～⑤

のうちから一つ選びなさい。解答番号は 15。

- ① 比喩
- ② 反語
- ③ 倒置法
- ④ 疑問
- ⑤ 対句

問3 空欄 B・F・G を補うのに、最も適当な語句の組み合わせを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 16。

- | | | | | |
|------|------|------|------|-----|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| B | B | B | B | B |
| すなわち | そこで | しかし | そこで | しかし |
| F | F | F | F | F |
| そこで | けれども | つまり | けれども | そこで |
| G | G | G | G | G |
| しかし | さらに | たとえば | また | つまり |

問4 傍線部C「印象派」とあるが、フランスでこの芸術運動が盛んであった時代は、日本の明治時代初期に相当する。この時期の作者と著作の組み合わせのうち、間違っ**た**ものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 17。

① 二葉亭四迷―「浮雲」

② 坪内逍遙―「小説神髓」
しょうよう

③ 尾崎紅葉―「金色夜叉」
こんじきやしや

④ 田山花袋―「蒲団」
ふとん

⑤ 山田美妙―「五重塔」

問5 傍線部D「目の、目による、目のための絵画」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 18。

① 日本ではおひさまの光といえば「ぼかぼか」と感覚的に表現されるが、ヨーロッパの太陽は「チカチカ」であり、私たちの目の中までもチカチカさせるため、目に安らぎを与える野原や湖を描いた絵画。

② 夏の昼間には緑色、夕焼けに染まればオレンジ色、夜の闇に沈めば黒紫、冬になれば茶褐色というように、季節と時間によって刻々と変化していく野原や湖の色の様子を目で実感できる絵画。

③ 現実の野原を湖と見間違える人はおらず、この二つは全く別のものであるが、野原と湖を見間違えるように、絵の具をあらかじめ混ぜて色を作る手法で、巧みに目の錯覚を起こさせる絵画。

④ ヨーロッパのチカチカした太陽の光が風景や人にあたって私たちの目に飛びこんでくることを、絵の具でいろいろな色の細かい斑点を並べて描くことにより、目の中で再現しようとした絵画。

⑤ 物の姿を固定的にとらえず、目にうつる瞬間的な像に注目する印象派の特徴を持ち、野原であるのか、湖であるのか、区別が曖昧なために、目でしっかりと見極める必要のある絵画。

問6 傍線部E「そこ」の指す内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 19。

- ① ヨーロッパの太陽の光が、「ぼかぼか」ではなく、「チカチカ」であるということ
- ② 印象派が、絵の具でいろいろな色の細かい斑点を並べて描いているということ
- ③ 印象派が、見えない人に伝えるのが最も難しい様式のひとつだ、ということ
- ④ 光が風景や人にあたって私たちの目に入ると、「チカチカする」と感じるということ
- ⑤ 印象派の絵画について、文字通りの視覚的な経験として実感するということ

問7 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 20。

- ① ソーシャル・ビューでは、絵画の大きさ、色、モチーフなどの「客観的な情報」と、絵画を見て思ったこと、印象、思い出した経験などの「主観的な意味」を言葉にする必要があり、中でも大事なのが、客観的な情報である。
- ② 美術館の職員として毎日のようにその絵を見ていても、絵画の描かれた時期や背景を完全に誤解していて、間違った説明をすることがあり、そのような「情報」の間違いにこそ、「ソーシャル・ビュー」の面白さがある。
- ③ 印象派というのは、光を描くことをその特徴とし、ヨーロッパの太陽の光が私たちの目の中までもチカチカさせるということを描こうとするもので、そのため野原は常に明るい黄色の斑点で描かれる。
- ④ 印象派の絵画では、野原であるのか湖であるのかという区別は問題ではなく、物理的には同じものが、見た人の経験に根ざして湖から野原に変化して見えるよう、「湖っぽい野原」として描かれる。
- ⑤ 野原や湖の色は、青、緑、赤、黄色……と季節と時間によって刻々と変化するもので、印象派の絵画はその目にうつる瞬間的な像に注目して描かれるため、湖と野原が似た絵になることがあるが、それが印象派の本質である。

国語の問題は次に続く。

(下書き用紙)

第3問

次の各問い（問1～問3）に答えなさい。

問1

次のア～エの語句の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 21 ～ 24。

ア

忙中有閑

21

- ┌───┐
└───┘
- ⑤ 忙しい時期に皆が静かに働いていること

④ 忙しく働く人が多い中に怠ける人がいること

③ 忙しく余裕がない中でも少しは休めること

② 忙しい時期と暇な時期が交互にあること

① 忙しくて休む暇がまったくないこと

イ

堂に入る

22

- ┌───┐
└───┘
- ⑤ 厳かな雰囲気の中で緊張すること

④ 儀式を行うための準備をすること

③ スポーツの分野などで高く評価されること

② 仏教などの厳しい修行に耐えること

① 学問や技芸が身についていること

ウ 対岸の火事

23

- 
- ① 不幸な出来事がいつ自分の身にふりかかってくるかわからないこと
 - ② 自分にはまったく関係がなく、苦痛や負担などがないこと
 - ③ 他人の言動を手本として、自分のために役立てること
 - ④ 他人のよくない言動を、自分の反省や戒めに役立てること
 - ⑤ 周りに困っている人がいたら、進んで助けるべきだということ

エ けんもほろろ

24

- 
- ① どちらともわからない、はっきりしない様子
 - ② お詫びや謝罪の気持ちをこめた、すまなさそうな態度
 - ③ 配慮を欠いた、相手を不快にさせる言動や態度
 - ④ 相手を攻撃しようとするが、うまくいかない様子
 - ⑤ 人の頼みなどをまったく聞かず、そっけない様子

問2 次のア～ウの語句の使い方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 25
27。

ア 目端が利く

25

- ① あの人 は 目端 が 利く ので、うわさ話 に 敏感 である。
- ② 彼は 目端 が 利く ので、仕事 を 安心 して 任せ られる。
- ③ 彼は 目端 の 利いた 顔立ち で、人気 の ある 俳優 である。
- ④ 目端 の 利く 人は、あの 山 の 上 に ある 建物 まで 見える そうだ。
- ⑤ あの人 は 目端 が 利く ので、様々な 方面 に 知り 合い が いる。

イ 末席を汚す

26

- ① あんな 人 を 招待 する とは、晴れ の 場 の 末席 を 汚す よう な もの だ。
- ② この 度 の 社員 の 不祥 事 は、わが 社 の 末席 を 汚す 出来 事 で あった。
- ③ 会社 の 末席 を 汚す 一 社員 として、ぜひ 貢献 したい と 考えて います。
- ④ パーティー で 着席 場所 を 間違 え、末席 を 汚す こと になっ て しまっ た。
- ⑤ 祝賀 会 の 末席 を 汚す こと にな り ます が、よろしく お願 い いたし ます。

ウ かぶとを脱ぐ

27

- ① 久しぶり に 会った 友人 と、かぶと を 脱い で 夜遅く まで 語り 合っ た。
- ② 仕上げ の 段階 で かぶと を 脱い で しまい、あまり いい 出来 で は なかっ た。
- ③ この 数学 の 問題 は あまり に 難しく、クラス の 全員 が かぶと を 脱い だ。
- ④ 彼は 優秀 な の だが、普段 は かぶと を 脱い で 才能 を 隠し ている。
- ⑤ 困っ てる 友人 を 助ける ため に、ここ で かぶと を 脱ぐ 覚悟 だ。

問3 次のア～ウの語句の対義語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 28
30。

ア 偶然

28

イ 概略

29

ウ 膨張

30

- ① 狭小
- ② 詳細
- ③ 繊細
- ④ 必然
- ⑤ 収縮
- ⑥ 漫然